

江戸の名所・王子

加藤 貴

はじめに

一 江戸凶屏風の「王子」

二 王子権現社の祭礼と槍の交換

三 金輪寺と五香湯

四 狐火会と王子の繁栄

論文要旨

江戸が巨大過密都市となり、身近な自然を喪失していくなかで、日常的には自然との交流が困難となっていたため、江戸市民は近郊の景勝地を遊覧することにより、その代償としていった。その一方で、都市民は個として存在し、生活の順調な進行を阻害する要因、つまり病氣・火災・盗賊などの厄を除くことと商売繁昌を祈願するため寺社に参詣していった。このように江戸市民にとって名所は、自然との交流と神仏との交感によって、延気（気晴し）を約束してくれたのである。そのきざしは、一七世紀中期ごろからみられはじめるが、特に、一八世紀以降、江戸の近郊に多彩な名所が成立していき、江戸市民は名所をめぐる広範な行楽行動を展開していった。こうした点について、江戸名所の一つとして知られた王子を例にみていった。王子は、江戸日本橋から北へ約二里半ほどの日帰り可能な場所、荒川沿岸の低地部と武蔵野台地、あるいは荒川に流れ込む石神井川が生み出した溪谷など、変化に富んだ自然に恵まれ

五 王子の狐人形
六 落語「王子の狐」
おわりに

ていた。一方では、王子権現社・王子稲荷社・金輪寺きんりんという、強力な利益を保障してくれる寺社も存在した。こうしたことから、王子は、春には王子稲荷の初午や飛鳥山の花見、夏には王子権現の祭礼や石神井川沿岸の滝浴み、秋には石神井川沿岸の滝野川の紅葉狩りや虫聞き、冬には雪見というように、四季を通じて行楽地として、多くの江戸市民を集めていった。そして、王子権現の祭礼時に交換された厄除けのお守りとしての槍形、金輪寺で頒布された万葉の五香湯ごかうとう、王子稲荷の参道で売られた土産物であるカラクリ仕掛の狐人形や、落語の王子の狐について、その成立、習俗の変遷などから、一八世紀中期以降に、王子が江戸の名所として有名となり、多くの江戸市民が訪れるようになると、それらの人々を目当てに、あるいは、さらに多くの人々が訪れるように、名所の側でもさまざまな装置を創出していったことが確認できた。